

実際に災害が起こった際の事業所の状況についても、事例を挙げてご説明をいただきました。障がいのある方が、災害があったことを理解できず、避難先などで「何故ここに居なければならぬのか？」など、不安や先への見通しが立たないことへのストレスから精神的に不安定になったり、断水や電気・ガスの不通などにより食事が摂れない、衛生面で清潔に保つことが出来ないなど、様々な問題が発生します。

福祉避難所ガイドラインの改定については、要配慮者が予め定めた施設へ「直接避難」も可能になりました。災害現場の最前線と、実際の障がい者支援にあたる私たちでは使い勝手に違いがありますので、生活主体者として自分たちの生活の場をイメージして作ってくださいとおっしゃっていました。

続いて、「福祉×防災×コミュニティみんなで助かるために個別避難計画からみる福祉防災の全体像」のテーマで、一般社団法人 福祉防災コミュニティ協会 理事 湯井恵美子様よりご講演頂きました。登場されるやいなや、会場の方々と一緒に認知体操が始まり、眠気が覚めました。自己紹介を聞かせて頂き、「なんとバイタリティーのある障がい児の親御さんだろう」と圧倒されました。

「個別避難計画」

「避難」とは、「避難行動(安全な場所への移動行動)」だけでなく、「避難生活(安全な場所での暮らしの再建)」の両方を指す。計画を立てるときには、親は客観的に子供の事を見られないので、関わりのある人たちと一緒に、子供を含めた自分達の避難を考える。

「身の回りで注意することは」

- ・(実際に何が起こるのか) 障がいのある人に事前に緊急地震速報を毎日聞かせる。(親が音を聞かせることは簡単にできる)
- ・寝室には肩より高い家具を置かない。
- ・避難所でも運動をして、炭水化物ばかりでなくたんぱく質もとる。
- ・地域のつながりを作り、仲間の見守りは自分たちでする。
- ・心の健康も保ち体力づくりをする。

など、たくさんの教えを頂きましたが、『どんな重い障がいでも力がある』と私たちにエールをくださいました。

最後のシンポジウムは「自然災害と自助・互助・共助・公助」というテーマで、司会・進行は又村あおい氏。シンポジストとして後藤至功氏、湯井恵美子氏、当会副理事長の上宮俊一氏が登壇されました。

上宮氏より、実際に持ってこられたマイ防災袋を見せていただき、会場の皆さんで確認しました。緊急用ホイッスルなど見落としがちなものもあり72時間は救助や救援物資が無い想定でマイ防災袋を用意することが重要だとおっしゃっていました。

また、地元での避難に備えて、民生委員さんが相談に来られたが、障がい者の避難の話については前提となる知識がないため、噛み合わなかったという経験についてもお話いただきました。避難計画を作るだけでなく、それをきっかけとして自分だけではなく仲間と一緒にできることについて考えておく。事業所のメンバーはそれぞれ居住地域が違うので、住所ごとのグループを作ることが出来ないかを期待しているとおっしゃっていました。

続いて後藤氏より、現在の仕組みの中で市町村として考えておいてほしいことは、災害時に障がい当事者の「安全ゾーン」がきちんと確保されていなかったことが課題だと思う。「こうして欲しい」という声を実現できず、要望に見合うような仕組みが出来なかったことを非常に残念に思う。

例えば、カラオケボックスを福祉避難所にしてもらえるならば、個室・トイレ・食事というような環境も整えられるのではないかと。何かあった時に必ず警察・消防につながるような通報システムを作ってほしい。また、電気の供給ステーションを企業と一緒に作っていただきたい。そして、福祉避難所は病院ではなく生活の場であり、障がいのある方も生活主体者として、自分たちの場所を作ってくださいとおっしゃっていました。

続いて湯井氏より、まずは制度を知る。自分達は何に守られているかを十分に親が知っておくこと。

- ・個別避難計画を作成しておく。
- ・行政に避難要援助者の名簿を作っていただく。
- ・住民地図を色分けにして、「支えあいマップ」を作り、災害時に地域の人の力を借りて、人手が足りないところを担っていただく。
- ・行政ネットワーク・地域ネットワーク・互助ネットワークを作り、資金の備蓄をしておくことも大切だとおっしゃっていました。

今回の大会に参加して、今までどこか他人ごとだった災害についてしっかり向き合うことが出来ました。参加されていた皆さんも、家に帰ってから部屋中をチェックされたことと思います。実践につながる有意義な大会となりました。

関係者の皆様に感謝申し上げます。